Yamakado News Letter

山門水源の森を
次の世代に引き継ぐ会

台風で傷ついた山も秋の気配

炭焼き小屋周辺の様子　10月24日

9月4日に近畿地方を直撃した台風21号によって、山門水源の森でも沢道沿いのヒノキがなぎ倒されたことは先月号で書きました。それだけでなく、風当たりの強い尾根筋や山頂付近では木々の葉っぱが吹き飛ばされ、残った葉も多くが傷ついてしまいました。そんなことで、今年の紅葉はどうなることだろうと心配しましたが、沢道出口の炭焼き小屋付近では例年のように少しずつ紅葉が広がっているようで、一安心です。

一方で、湿原から守護岩方面を見上げると、ブナの幹や枝が露わになった様子が見られます。幹を覆っている葉が無くなっているからです。こんな調子ですから、こちらの紅葉は今年は少し寂し目になるような感じがします。

湿原から守護岩付近を撮影した様子　左、今年10月29日　右、昨年10月30日

先行伐採の様子　10月2日

路面掘削と路肩補強　10月14日

作業道進捗状

昨年度より取り組んでいる県協働事業による作業道作りは残り100m程になってきました。これから一番大きな谷筋を横断する難関ルートに差し掛かるところです。今年も作業可能な天候の日が残り少なくなってきましたが、スケジュール的にはギリギリといったところです。

ユキバタツバキ果実採取

ユキバタツバキ採取の様子と採取したサンプル　Photo 藤本H

今年4月、新潟大、京都大、森林総研から6名の研究者がユキバタツバキの現地調査に来られました。現地を初めて見た研究者からは、狭い範囲にこれほどの多様性があるとは想像していなかったとの感想を述べられました。また、ここのユキバタツバキの果実の遺伝的調査を行いたいので、果実が実ったら採取して送ってほしいとの依頼を受けていました。その依頼を受け、10月６、７の両日に果実採取を行いました。ユキバタツバキは花は沢山咲かせるものの、実るまで残る果実は多くはありません。タグ付けした8000を超える株の中から、２個以上実を付けた株を見つけられたのは21株。思った以上に大変な作業でした。採取したサンプルを新潟大へ送りました。

少し難しい話になりますが、これら研究者の方々がどのような研究をされているかを紹介したいと思います。種が分化するということは生殖的な不和合成が進化する（混血や雑種が生まれないこと）と考えられています。日本全国の海岸沿いに分布するヤブツバキと日本海側の多雪地に分布するユキツバキ、このの２種類のツバキは形から見て、また葉緑体DNAを調べることでも識別が可能です（種が分化しているといえる）。ところが一方で、この両種は同じ所に分布すると雑種を作ることは皆さんご存知の通りです。生殖隔離が完全に起こっていないことが推察されています。そこで、花の形態や花の色の違いと遺伝的違いを比較することで、種分化の程度を明らかにすることを目的に研究をされている、ということのようです。（日本生態学会第62回全国大会　講演要旨を参照）

遺伝的にはユキツバキとヤブツバキは約400万年前には分化したと考えられる、とのこと。人間と猿が分化したのと同じ頃とも言えそうですが、そんな大昔からのツバキという生物が辿った歴史を明らかにしようとする研究です。その一端に参加できるのは、とてもワクワクすることです。調査結果を楽しみに待ちたいと思います。

今月の森の様子

イヌノヒゲとミミミカキグサの群生 10/23

森へ帰る準備をするシュレーゲル 10/12

開花数が増えてきたリンドウ 10/25

よく実ったミツバアケビ 10/8

カシワバハグマを吸蜜するクモガタヒョウモン 10/3